

氏名（本籍）	金子 楓		
学位の種類	博士（心理学）		
学位記番号	博甲第 9973 号		
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	母親のゲートキーピングに関する研究—乳幼児期の子どもをもつ親を対象として—		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口 佳和
副査	筑波大学教授		杉江 征
副査	筑波大学准教授	博士（学術）	水野 智美
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	外山 美樹

論文の内容の要旨

金子 楓 氏の博士學位論文は、乳幼児期の子どもをもつ母親のゲートキーピングの関連要因の検討と、その子どもの心理的適応への影響過程を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

母親のゲートキーピングとは、「父親と子どもの相互作用や父親の育児に対して、母親がコントロール行動、促進行動、抑制行動を用いて日常的に一貫して行う行動で、父親の育児関与に影響を与える親同士の複雑な一連の行動的相互作用」と定義されている（Puhlman & Pasley, 2017）。著者は、日本では未だコントロール行動を含めて母親のゲートキーピングを網羅的に測定できる尺度は存在しないと批判し、以下の 4 点を目的とした一連の研究を行った。(1) コントロール行動を含めた母親のゲートキーピング尺度日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討、(2) 父親のサポートの母親による受け止め方尺度の作成と信頼性・妥当性の検討、(3) 母親のゲートキーピングと父親のサポートの母親による受け止め方の関連の検討、(4) 母親のゲートキーピングが子どもの適応に与える影響過程の、養育態度・養育スキルを含めた検討。以上 4 つの目的を検討するために、著者は 6 つの研究を行った。

（方法）

著者は博士論文を構成する 6 研究の対象者を、乳幼児期の子どもをもつ父母とした。6 研究全体で 1041 人の母親、214 人の父親を対象とした。内訳は、研究 1 母親 313 人、研究 2 父親 101 人、研究 3-1 母親 93 人、研究 3-2・研究 3-3 母親 334 人、研究 4 母親 317 人、研究 5 母親 301 人、研究 6 父親 113 人であった。著者は、全ての研究を質問紙により実施した。

（結果）

著者は、研究 1 では母親用、研究 2 では父親用の「母親のゲートキーピング尺度日本語版」を作成した。データ分析の結果、母親用・父親用とも、母親のゲートキーピングは「コントロール」、「促

進」、「抑制」の3因子構造となることを示した。著者は、父親用のコントロールを除き、高い信頼性を示し、妥当性についても、母親用について満足な結果を示した。

研究3で著者は、父親のサポートに対する母親の受け止め方尺度の構成と信頼性・妥当性の検討を行った。著者は予備調査により、項目原案を作成した後、2つの本調査で因子構造の確認、信頼性・妥当性の検討を行った。その結果、情緒的サポートに対する受け止め方4因子、情動的サポートに対する受け止め方3因子、手段的サポートに対する受け止め方4因子から成る尺度を構成した。著者は分析の結果、全ての下位尺度は高い信頼性と妥当性を有することを示した。加えて著者は、偏相関分析を実施し、いずれのサポートでも、母親の育児感情、育児支援感、夫婦関係満足度に対して下位尺度ごとに異なる役割を示すことを明らかにした。

研究4で著者は、母親のゲートキーピングの3因子に対する関連要因を、研究3で作成した父親のサポートに対する母親の受け止め方を中心に、階層的重回帰分析を用いて検討した。分析の結果、以下の諸点を明らかにした。①コントロール行動は、父親以外のサポートが無いほど、また、父親の育児・家事に対する肯定的受け止めが高い場合には期待量が多いほど増加するし、父親の育児・家事に対する否定的受け止めが高いほど増加する。②促進行動は、父親の育児・家事に対する母親の肯定的な受け止めが高いほど、否定的な受け止めが低いほど増加し、手段的サポートによって父親の成長を感じるほど減少する。③抑制行動は、父親の育児・家事に対して母親が否定的に受け止めるほど、情動的サポートの期待量が高いほど増加し、情動的サポートの供給量が多いほど低下する。

研究5で著者は、母親を対象に、母親のゲートキーピングが母親自身の養育態度、養育スキル、母親が評価する子どもの適応に与える影響過程を検討した。分析の結果著者は、①コントロール行動は子どもの情緒的問題を高めること、②促進行動は母親の養育態度や養育スキルを介して子どもの適応へ影響を与えること、③抑制行動は直接的にも、ネガティブな養育スキルを介して間接的にも、子どもの適応に影響を与えることを示した。

研究6で著者は、父親を対象に、母親のゲートキーピングが父親の養育態度、養育スキル、父親が評価する子どもの適応に与える影響過程を検討した。分析の結果著者は、①コントロール行動はネガティブな養育行動につながることで、②抑制行動は、直接的にも養育態度の応答性や養育スキルを介して間接的にも、子どもの適応に影響を与えることを示した。

著者はさらに研究5・6において、子どもの性別によって影響が異なることを想定し、多母集団同時分析を行った。その結果、研究5・6どちらも、分散・共分散、係数すべてに等値制約を置いたモデルが採用され、子どもの性別による違いはないことを示した。

(考察)

研究1と研究2の結果により、母親のゲートキーピングは米国同様に日本でも促進、抑制、コントロールの3因子構造が確認されたことから、著者は因子構造自体に日米の差がないと主張し、母親評定尺度については、日本語翻訳版の尺度の信頼性・妥当性も十分であるとしている。その一方で、父親評定尺度については、信頼性・妥当性に一部課題が残ることを認め、改良の余地があることを示唆している。研究3・4で著者は、3種類のゲートキーピング行動がそれぞれ固有の規定要因をもつことを示し、研究5・6では父母の養育態度・養育行動を介してそれぞれ独自の仕方での子どもの心理的適応に影響を与えることを示した。以上のことから著者は、いくつかの課題はあるものの、母親のゲートキーピングをコントロール、促進、抑制の3側面から捉えることの有効性を示したと主張している。

(結論)

一連の研究から得られた知見により著者は、今後の母親のゲートキーピング研究やコペアレンティング研究においては、従来の促進と抑制に加え、コントロールも含めて検討することが有益であると結論づけている。

審査の結果の要旨

(批評)

女性の社会進出が進み、夫婦共働きの家庭が一般的となり、家事・育児負担の夫婦間での平等化が叫ばれているが、現実では未だに母親に負担が偏っている日本社会において、母親のゲートキ

ーピングという概念を取り上げ、その個人差を測定し、規定要因や子どもの適応への影響過程を明らかにした本研究の意義は、時代の要請に応じたもので高く評価できる。また、3種類のゲートキーピング行動の差異を、規定要因や子どもの適応への関連について、堅実な方法論を用いて明らかにした点は、わが国で初めての知見であり、高く評価できる。ゲートキーピングの3種類の行動の機能が夫婦関係の良し悪しや質によって受ける影響や、ペアデータによる分析は今後の課題ではあるが、夫婦関係と子どもの適応の問題についての心理学的研究に新しい視点をもたらしたと言える。

令和3年1月19日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。